
新世紀エヴァンゲリオン～未来への案内人～後日談【超短編】

鉢嶺来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新世紀エヴァンゲリオン〜未来への案内人〜後日談【超短編】

【Nコード】

N3401M

【作者名】

鉢嶺来

【あらすじ】

未来への案内人の後日談

（前書き）

シズクが正体を明かすシーンが見たいってリクエストがあったので、

超短くてごめんなさい。

「…話す？みんなに？」

レイは玉葱の天ぷらを口に咥えながらシズクにそう聞いた。

「うん、やっぱり、何時までも隠してるわけにもいかないし、きつとみんな受け入れてくれる…と僕は信じてるから」

「…そう、それがシズクの決めたことなら私は止めないわ」

「うん、でもやっぱりちょっとだけ心配だからレイも側にいてくれるかな？」

「……………ええ」

話しながら二人は食べ終わったお弁当を包む。

「二人で何の密談だい？」

カヲルがそこに加わる。

平和になってからこっちシズクとレイと一緒に弁当を食べる〃
カヲルが割り込むは

それは確定された数学の式のようなものでもはや日常と化していた。

「うん、後で話すよ、シンジくんやアスカも交えて、ね」

シズクはそう言うにつこりと微笑んだ。

視線の先には一緒にお弁当を食べてるシンジとアスカの姿があった。

放課後・葛城邸。

「いきなり、みんなを呼び出して、何よ？」

アスカは椅子の背もたれに肘をかけながらシズクに言った。

「うん、前にさ、アスカ言ったじゃない？」

何時かアンタも話さないよって、そのこと…話そうかって」

「話しなさいって、確かに言ったけど…」

あんたが元は使徒だったっていう秘密以外に何かあんの？」

「…うん、多分、それ以上にびっくりすると思う」

「今更シズクが何者でも驚かないと思うけどね」

「じゃあ…話すよ」

そう言うのと、少しだけ息を飲み込み、シズクはぽつり、ぽつりと話し始めた。

自分が実は碇シンジであったこと。

未来（今となつては時空的に過去になるが）からやってきたこと。

その未来ではサードインパクトが発生したこと。

そこでリリスと混ざつて新たな使徒になったこと。

自分を絶望したこと。

過去へ帰りたいと願ったこと。

そして、気付いたらこの世界へとやってきていたこと。

全てが淀みなくシズクの唇から紡ぎだされていく。

それは歌のように。

シンジは聞きながら呆然としている。

アスカは顎を手で押さえながら話を聞いていた。

カヲルは変わらずに笑っている。

全てを話し終わると、シズクは軽く溜め息をついた。

「……驚いた、でしょ？……今まで騙しててごめん」

そう言つて頭を下げようとしたシズクの頭をアスカが立ち上がっ

て強引に抑える。

「今更、そんなことで私たちがシズクをどうしようとか思うのっ!？
頭下げんの止めなさいよ!

リツコの時も言っただけね、シズクはシズク、シンジはシンジ!
過去にあんたがシンジだったとか、元は男だったとか、未来から
やってきたとか、

そんなこと、全部『過去』のことでしょっ!？
大事なのは今、あんたが『シズク』だってことでしょうがっ!!

アスカの言葉にシズクの瞳から不意に涙が零れた。

「…う、ん、そうだね…アスカの言うとおりだ」

アスカがシンジに振り返って指をさす。

「シンジも!一言シズクに文句を言う!それで、この話はお終い!
!いい!?!」

「う、うん」

シンジはそう頷くとシズクに近づく。

「シズク、正直、驚いた、けどさ…やっぱりシズクはシズクだよ、
僕はシズクと僕が同じ人間だなんてとても思えない、
ずっと僕よりしっかりしてるしさ、だから…その、なんて言うか

…」

シンジは言葉に詰まってしまったのか頭をポリポリと掻いた。

「あゝっ！まだるっこしいわねっ！！

要するに、シンジにとって、シズクは何時までも憧れの存在なわけ！

未来を経験したから何！？それで私たちが悪いようになったの！？

こっちの世界じゃサードインパクトは起きなかった訳よね？

じゃあそれだけでシズクはこっちの世界に來た意味があつたんじゃないのっ！？

胸を張りなさいよ、シズクは、この世界を守つたって！！」

「…………アスカの言う通り」

レイがシズクの震える肩に優しく手を置いた。

「うん…カヲルくんも許してくれるかな…？」

「許すも何も、僕は最初から君が好きだからね、

それは例え君が何者であろうと変わらない答えだよ」

「みんな、本当にありがとう」

「だからっ！頭を下げるなっ！！」

「うん、じゃあ…」

そう言うつとシズクは腫らした瞼を擦りながらアスカに手を差し出した。

「…何よ？」

「改めて、握手、シンジくんをお願い、僕の大好きなアスカ」

シズクにそう言われた瞬間にアスカの頬が熟れたトマトのように染まった。

そっぽを向きながら手だけを握り返す。

「ま、まあ、そこまで言うんなら、面倒見ないでもないわ…
あんたは第2の人生を思いっきり楽しみなさい」

「うん」

シズクとアスカの手は何時までも握られたまま窓から入ってくる夕焼けで赤く染まった。

（後書き）

これで本当に未来への案内人は終了です。
お付き合いしてくださった方、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3401m/>

新世紀エヴァンゲリオン～未来への案内人～後日談【超短編】

2010年10月9日14時42分発行